

地理学から見た『農商務省藏版 歐米巡回取調書』

——フランス国を中心に——

大 嶽 幸 彦*

(平成9年4月8日受理)

要 旨

本稿は、明治21年発行の『農商務省藏版 歐米巡回取調書』を地理学の立場から分析し、考察を加えたものである。今回は総覧並びに法朗西國ノ部、1～3巻を取り上げた。本論では地理学的考察が可能な箇所を引用し、それらについて若干の考察を試みた。

KEY WORDS

Reports of Investigation on Europe and the United States 【歐米巡回取調書】

Eye of Observation 観察眼

Consolidation of Land (Remembrement) 土地分合 (耕地の集団化)

1 は じ め に

筆者は先に拙稿「風土と人間への地理学的アプローチ——ヨーロッパの風土と日本人を例として——」において、幕末頃、条約調印とヨーロッパ視察に日本から出かけた幕府一行の、首席代表であった柴田剛中の日記を分析したことがある。しかし、柴田の詳細な日記そのものの内容についてはほとんど入りこんでおらず、彼の作った漢詩数篇の風土的背景を考察した程度であった¹⁾。次に、拙稿「幕末前後における二人の先覚者の地理思想——吉田松陰と福沢諭吉の旅行記を中心に——」において、特に福沢諭吉の『西航記』の記述の中から田園風景、港湾、人間観察に関する彼我の比較について考察するところがあった²⁾。その後、筆者の研究関心は勤務の配置換もあって地誌学研究や地理思想に関するテーマに移っていった。そのため、ヨーロッパに出かけて行って異文化に接し、彼我の比較を試みた記録等の分析からは遠ざかっていった。昭和63年頃、古書目録の中で『農商務省藏版 歐米巡回取調書1～7巻』を見つけ早速購入した。しかしながら、当時は別の研究テーマを追っていたこともあり、意識の底には絶えず取調書の分析のことが浮かんできたものの、たちまち5～6年が経過した。それらのテーマの研究が一段落したこともあり、ようやく本書の分析に取りかかることができた。従って、本稿は筆者の途切れ途切れの研究関心テーマの一つで、偶然手にした『歐米巡回取調書』たる記録の中味に興味を持ち、地理領域からのアプローチを試みたものである。『歐米巡回取調書』は1～7巻から成るが、今回はフランス国についての調査記録を中心に取り上げてみたい。巻数でいえば、1～3巻にあたる部分である。4巻以降の内容については次回に廻すことにしたい。次に、『歐

* 社会系教育講座

米巡回取調書』の内容について紹介し、フランス国に関する記述の中から地理領域に関する部分の分析と考察を試みてみたい。

2 「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」総覽並びに法朗西國ノ部

本書は明治19年3月13日より明治20年6月23日にかけ、欧米を巡回した谷農商務大臣以下6名が中央行政、地方行政を始めとして各国で調査し、蒐集した資料を取りまとめた記録である。本稿では、比較的地理領域に近い取調書の内容を分析し、考察を加えてみようとするものである。フランス国に関しては53号の取調書をまとめているが、内容は現地で翻訳したり、資料化して次々に日本に向け発送したものである。一行の1人、奥水産局長は病に罹り、ベルリンで客死しているが、後に見る旅程のきつさから推察されるように、随行員は命懸けで取調べにあたっている。取調書の総覽には、巡回中感じたことの要点を欧米巡回農商務感覚録としてまとめた箇所がある。まずは、この中から幾つか取り出し、検討してみよう。

感覚録 彼らが一番驚いたことは「當初列國一般ノ豪奢即チ國民生計ノ高尚ナル³⁾」とあるように、欧米諸国の生活水準が高い点であった。それは、国民が勤勉であり忍耐力が強く、資本、労働力、知識の三者がうまくかみ合っているためであると看破している。顧みて我が国の農商務施政の要点として、次の3点を挙げている。すなわち、「第一ハ國民ノ業務ニ勤クヘキ道路ニ横ハル直接間接ノ障害ヲ除クニアリ第二ハ其勤キヲ獎勵シ第三其保護スヘキヲ保護シ其誘導スヘキヲ誘導スルニ周到懇切ナルノ結果ニ非スンハアラス⁴⁾」とあるように、今日の中央省庁の保護・誘導行政のルーツを見る如くである。

「歐洲大陸ノ地理ハ政事上ノ區域アルモ方今ノ如ク交通自在ノ日トナリテハ學術又ハ物産上ノ關係ハ殆ント一國ト做スモ不可ナカルヘシ⁵⁾」と、今日のEUの出現を予想するような卓見を明治20年に述べている点は大いに注目される。各国の名産について我が国が他人の後を追って同じ物をつくり、過当競争するのと比較して次のように言う。「各々自國ノ適産ヲ以テ益々他ニ著名ナラン事ヲ勉ムルモノト謂フヘシ例ヘハ葡萄酒ノ著名ハ佛國ニ譲リ麥酒ノ名譽ハ獨乙ニ歸スルカ如ク⁶⁾」とある。実際はフランスでもビールを醸造し、ドイツでもワインを生産しているのではあるが、主産品は上記の事があてはまる。ちなみに、現在のビールとワインの生産量を挙げれば表1の如くである。

国を富ますのは、実学である工学、土木、理学、農学の進歩にあるとし、我が国が法律や文学にのみ傾きがちである⁷⁾点と比較している。彼我の比較は企業の設立に関しても筆が及んでいる。すなわち、ヨーロッパでは小規模経営から身を起し、利益を得るに従って事業を次第に拡張するのに対し、我が国では当初より大々的に事業を始め、店構えも壮観であり多数の役員を置いているのとは全く正反対である⁸⁾と述べている。その代表例として、ドイツのクルップ社を挙げている。クルップ氏は「少壯年ノ民居住シテ僅ニ業ヲ營ミ居タル陋隘ノ舊宅ハ今尚宇内ニ轟キタル同氏ノ大工場中ニ遺存シ觀ル人ヲシテ轉タ感賞セシムルニ非スヤ⁹⁾」とあるように、巨大企業の社長になっても初心を忘れぬよう心がけている点に感激している。

次に、原野の開墾の比較に関しても興味ある記述がある。

「我國原野ノ廣キ荒蕪地ノ多キトハ毎ニ内外ノ人口ニ膾炙スルモノナリキ過般モ歐洲ノ各地ニ就キ其耕地ノ開ケタル森林ノ盛ナルヲ視之ヲ我國ノ現場ニ比較シテ實ニ驚歎ニ耐ヘサルモノ

表1 ビールとワインの生産量

ビール (1994年)			ワイン (1992年)		
	千kl	%		千t	%
アメリカ合衆国…	23,714	19.3	日本……………	58	0.2
中国……………	14,100	11.5	フランス…………	6,522	22.6
ドイツ…………	11,858	9.6	イタリア…………	6,380	22.1
日本……………	7,193	5.9	スペイン…………	3,472	12.0
ブラジル…………	6,250	5.1	アメリカ合衆国…	1,545	5.4
イギリス…………	5,833	4.7	旧ソ連…………… ¹⁾	1,510	5.2
メキシコ…………	4,517	3.7	ドイツ……………	1,340	4.6
スペイン…………	2,502	2.0	アルゼンチン……	1,150	4.0
南ア共和国……	2,367	1.9	南ア共和国………	930	3.2
カナダ…………	2,299	1.9	ルーマニア………	750	2.6
オランダ…………	2,218	1.8	ポルトガル………	724	2.5
ロシア…………	2,200	1.8	ユーゴ……………	523	1.8
コロンビア……	2,100	1.7	ハンガリー………	500	1.7
フランス…………	2,045	1.7	オーストラリア…	459	1.6
チェコ…………	1,813	1.5	ギリシア…………	450	1.6
オーストラリア…	1,752	1.4	ブラジル…………	358	1.2
韓国……………	1,712	1.4	チリ……………	320	1.1
ベネズエラ……	1,542	1.3	ウクライナ………	290	1.0
ベルギー………	1,474	1.2	オーストリア……	258	0.9
フィリピン……	1,471	1.2	ブルガリア………	250	0.9
ポーランド……	1,398	1.1	クロアチア………	206	0.7
世界計×…………	122,895	100.0	世界計×…………	28,825	100.0

キリンビール株式会社資料および国連統計年鑑による。1) ウクライナを含まず。×
 その他とも。『世界国勢図会'96/97』に掲載。

アリ¹⁰⁾と。地質年代で言えば古い山地が多く、起伏の比較的ゆるやかなヨーロッパの森林は人口圧もあって開墾が進み耕地や牧場に変ったのに対し、急峻な山地の多い我が国では原野・荒蕪地は依然として多く残っている。その主な原因として、「開墾者牧畜者其人ニ永久占有セシムヘキ利益ノ薄キニ販セサルヘカラス¹¹⁾」と、我が国では苦勞して開墾しても利益の薄い点を挙げている。

商業の主なかなめは運輸にあるとし、さらに運輸の焦点は港にあると考え、港湾の建設を次のように述べている。

「我國ノ各港ハ未タ歐米洲ニテ所謂港ト稱スルニ足ル程ノ人工ヲ加ヘタルノ港アルナケレハ將來永遠ヲ期シテハ必ス此築港ノ舉ナカルヘカラスアルハ商業上ニ止ムヲ得サルナリ¹²⁾」と、欧米並みの港湾建設を提言している。

ところで、とかく欧米の方が我が国よりも先行しているととらえがちであるが、商業慣習についてはそうでもない。合衆国ニューヨークでの振出手形の決算が巡回当時、近年にない発明であると唱えられていたのに対し、我が国では数十年ないし百年前に行われていた¹³⁾と指摘している。そして、「我が慣習法ハ詳細ニ調整シテ取捨宜シキヲ制シ實行セシメハ其効益蓋シ著大ナルヘシ¹⁴⁾」と、商業慣習の良き点は残すようにと主張している。幕末以来、海外留学は盛んとなったが、工学の生徒を優先すべきとして、次のように述べている。すなわち、「世ノ文明ヲ進メ國ノ富ヲ増スノ術ハ一ヲ舉テ指定スヘカラスト雖モ工藝ノ進歩ヲ以テ先着トナスヘシ¹⁵⁾」と。

工学関係の留学生は現地で機械を見て内部の仕組みをよく覚えてメモし、帰国後類似の機械の製作に取りかかったことが多かったからである。巡回中の随行員が「工藝生徒ノ海外留學ヨリ急且要ナルハナカルヘシ何トナレハ本文ノ如キ必用ノ學業ハ未タ我國ニテ学フ能ハサルモノ多ケレハナリ¹⁶⁾」と書き記しているのも、明治初期のお雇い外国人の存在とその後の解雇を思い起すと興味がある。

巡回路 ここで巡回路の概略を見ておこう¹⁷⁾。

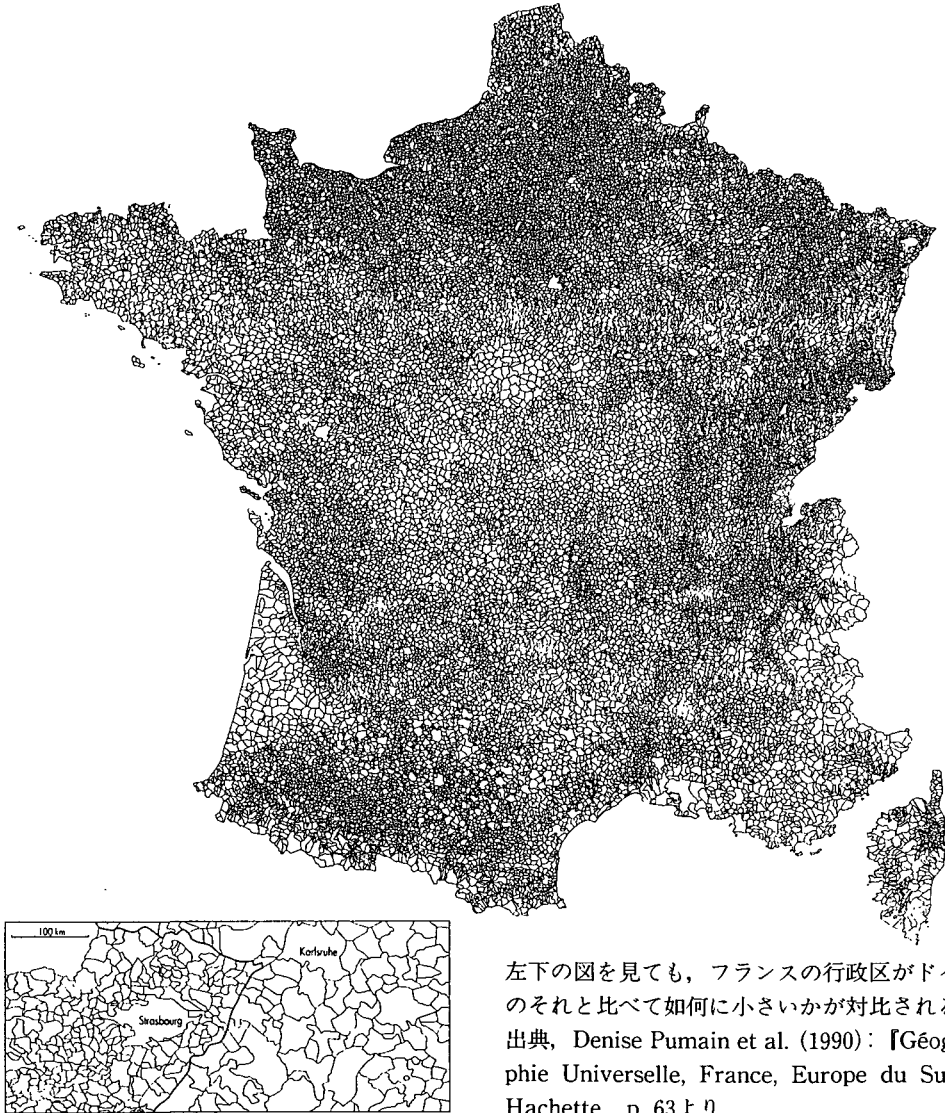
谷農商務大臣の欧米巡回は明治19年3月13日東京を発ち、明治20年6月23日に帰国する1年3カ月余りの旅程である。随行官は水産局長の奥青輔書記官(巡回中参事に転任)、樋口魯一秘書官、柴四郎一等属(巡回中農商務属)、道家齊一等属(同)、關澄藏七等属(同)、牧野健蔵の以上7名であった。明治19年5月より20年4月までは村田陸軍砲兵中尉(巡回中大尉に昇進)が陸軍省協議の上、谷大臣へ随行している。一行は横浜より乗船し、マルセイユ港に着いている。途中、谷大臣、柴、道家の3名はスエズより上陸し、エジプトの内地を経て、アレキサンドリアから再び乗船している。マルセイユからは一路パリに向かっている。5月11日に関はベルリンに派遣され、その後ドイツに滞在して農務の取調べに従事している。5月15日に牧野はスペインに派遣され、その後オランダに渡り水産上の調査に従事し、8月22日ベルリンに達している。再び11月14日オランダに赴き、明治20年1月11日ベルリンに到着し、奥氏の客死までベルリンに滞在している。5月27日より大臣並びに奥、樋田、柴、村田、道家はフランスを巡回した後、6月11日にスイスに移り、国内を巡回している。以下、細かな日程は省略するが、単独で、或いは2～3人のグループでヨーロッパ各国を精力的に巡回し、調査している様子がかがえるのである。無理がたたったためであろうか、随員の一人、奥氏はベルリンで明治20年8月3日に亡くなっている。一行は明治20年4月30日、イギリスのリバプールから帰途につき、合衆国を経由して同年の6月23日に帰国している。1人残った牧野氏は奥氏の死去に伴う残務整理をした後、10月31日ドイツを出発し、12月27日に帰国している。以上が大まかな旅程である。

フランスで購入した書物は農書、商書、工書、財産書、法書、雑書と分類されて一覧表が掲載されている¹⁸⁾。中でも、雑書の部の中でヨング氏の『佛国内地紀行』が挙げられているのが注目される。というのは、その書物はArthur Youngの『Travels during the years 1787&1789』を指すと思われるが、我が国ではアーサー・ヤング著・宮崎 洋訳『フランス紀行¹⁹⁾』として江湖に知られるようになったからである。

行政区分 フランスの中央行政に関し、行政区としては、縣レパルトマン(デパルトマンのことか、筆者注)87、區アロンジスマン362、郡カントン2,865、邑コンミュヌ36,095がある²⁰⁾としている。行政区分とは何を指すかとして、第1に徴兵署、第2に公證人の區域、第3に統計委員會を開くこと、第4に警部長が各郡を統轄すること、第5に縣會及區會議員撰舉區であること²¹⁾、以上の5件をもって行政区と称すると述べている。官吏の區別としては、第1に国家官吏フォトリテ、第2に補助官アンプロワイエ ヲーキシリエ、第3に執行官アジャンデキゼキュウシヨンの3種類²²⁾があるとしている。次に1886年におけるフランスの歳入予算²³⁾をみてみよう。当時のフランスの国情がわかるからである。

歳入予算 直接税4億3,619万フランのうち、主なものは地租1億7,876万フラン、人頭及家屋税6,926万フラン、戸窓税(借家人に対しての税)4,666万フラン、營業税1億481万フラン、馬車及馬税(今日でいえばさしずめ自動車保有税のことか、筆者注)1,082万フランなどである

が、アルジェリア特別税として植民地からの税収843万フランある点が注目される。間接税6億8,369万フランのうち、主なものは公書記入及書入質類税5億1,981万フラン、印紙税1億5,625万フラン、アルジェリア印紙税762万フランと、フランスが当時も文書中心の中央集権国家であることをうかがわせる。関税及塩税は3億9,494万フランで、輸入品に対する税、消費費が2億8,878万フランと高く、植民地砂糖税3,460万フランと続き、輸出にかけられる税は高くない。塩消費税は2,250万フラン、アルジェリアの関税は1,180万フランである。



左下の図を見ても、フランスの行政区がドイツのそれと比べて如何に小さいかが対比される。
出典, Denise Pumain et al. (1990): 『Géographie Universelle, France, Europe du Sud』
Hachette. p. 63より

図1 フランスの行政区分

飲料税等の嗜好品に対する税収は多く、11億3,063万フランにものぼる。主なものとしては、葡萄酒、林檎酒（シードル、筆者注）、梨子酒、味淋酒税が1億5,238万フラン、アルコール税2億4,954万フラン、ビール税2,299万フラン、内国産砂糖税1億1,715万フラン、急行鐵道旅客及商品運送10分の2税8,658万フラン、タバコ売上高3億7,543万フラン、雑税及雑収入が4,265万フランである。今日のいわゆる消費税にあたる税収がかなり高いといえよう。

郵便電信税は1億6,557万フラン、文官恩給積立金2,377万フラン、雑収入（公債証書株券ノ所得100分の3税）4,788万フランなども挙げられる。以上、総額30億1,608万フランが1886年の歳入予算であり、直接税が少なく、間接税、嗜好品税が高いことがわかる。

農務の沿革 フランス國取調書の第六號は農務の沿革についてであり、1,200年代から記述を始めている。しかし、本稿は取調書の内容を紹介しているわけではないので、19世紀以前の内容については割愛した。『巡回取調書』その二には新しい作物の導入について紹介した記事がある。例えば、綿に関しては次のように述べられている。「綿草移植ノ業ハ會テ世人ノ頗ル熱心シテ試ムル所ノモノナリト雖モ千八百九年氣候不順ニシテ好結果ヲ得ス抑佛國ニ於テ綿草栽培ハ固ヨリ至難ノ業タルハ農學者又ハ政府モ能ク了知スル所ナリ²⁴⁾」とあるように、自然条件から言ってもフランスでは綿作は無理であると思われたが、「政府ハ今回百方力ヲ盡シ綿草ノ栽培ヲ獎勵シ之ヲ試作スル者ニハ賞金ヲ與ヘ又其繁殖ヲ計リ人民ニ實例ヲ示サント欲シ綿草栽培場ヲ四ヶ所ニ設ケ大ナル規模ヲ以テ培養セリ²⁵⁾」と、綿作導入を試みている。

フランスはイギリスと戦争したため、「東洋物産價額ハ非常ニ騰貴シタルカ爲メニ政府ハ専ラ其物産ノ移植ヲ務メタリ然モ珈琲ノ如キハ固ヨリ内地ニ繁殖スヘキモノニアラスト雖モ砂糖ニ在テハ甘蔗ノ代リニ内國産ノ或ル植物ヲ以テ糖分ヲ取得スルノ望ナキニアラス²⁶⁾」。さとうきびから生産する砂糖に代って、甜菜からの砂糖製造を期待している。葡萄の糖分からも砂糖を採り出すべく実験を重ねたが、一般の需要に応ずる程には至らなかった²⁷⁾。これに反して「甜菜ハ學理上充分ノ見込アリテ世人ノ最モ研究スル所トナレリ²⁸⁾」。

明治19年5月22日、パリより発せられた欧州巡回特報第4號には、芸術の国フランスが美術の保護に熱心であることを詳しく報じている。まず、パリ市内にあるゴブラン織の製造所を見学した時の様子を見てみよう。

ゴブラン織 「ゴブラントハ羊毛ト絹糸ヲ交互ニ織リタル（畫文ノ陰生ヲ織出スニハ羊毛ヲ用ヒ同色ノ地色織出シニハ絹糸ヲ用フルカ如シ）文綿ノ名ナリ²⁹⁾」とある。文様は人物長獣草木等を配し、豪華絢爛たる織物である。2尺位の織物が当時4,000フラン（邦価壺千円）もする高価なものであり、需要先は王公貴族の壁掛けや扁額であった³⁰⁾という。職工1人が1年間でわずか2尺織出すのに過ぎない³¹⁾と言われるほど、織物中の絶品であった。取調書の記述はゴブラン織の様子を詳細に観察し、記録に残している。1枚の織物が仕上がるのに2～3年、あるいは10数年にわたる³²⁾という。

明治19年6月15日、スイスのベーム（ベルンのことか、筆者注）発の特報第六號は、リヨンの生糸検査所について報告している。

リヨンの生糸検査所 絹織物で有名なリヨンを訪れることは、明治末から第二次世界大戦前まで我が国の生糸の輸出が盛んだったことを考えあわせると、極めて有意義なものであったであろう。

「里昂ハ絹織物ヲ以テ世界著名ノ地ナレハ隨テ生糸ノ需用モ亦歐洲各市府ニ冠タルノミナラス需用者即織屋ノ直接取引ナルヲ以テ生糸ノ精粗ハ自家利害ノ係ル處最モ痛切ナリ³³⁾」。リヨン

が絹織物で世界に知られているだけに、生糸の質に精粗があつてはならず、検査所を必要としたのである。

次は、パリ市外セーブルの陶磁器製造所を見学した時の記録である。

セーブルの陶磁器製造所 「セーブルノ陶磁器ハ世界ニ珍重セラレテ陶磁器ノ王ト推サル³⁴⁾」とある。「製造場ニ入りテ之ヲ周覽スルニ原質ノ土石ヲ碎粉シ沈殿セシメ泥ヲ捏子陶磁ノ形ヲ作り畫ヲ施シ焼上ケ又ハ焼上ケタル後ニ精工ヲ施ス等我國ノ製造法ニ比較シテ進歩セルモノ一ニシテ止マラスト雖モ最モ製造上ニ便ナリト見受クルモノハ陶磁器ノ製造臺ヲ足ニテ回轉セシムルナリ³⁵⁾」とあるように、観察がこまかく、我が国の事例と比較しながら、文明開化のために技術を詳細にメモし、どん欲に取入れようとしていた様子がうかがえる。

百工製作場内の労働時間に関する布告は1848年9月9日に發布されている。第一條では、職工の一日の労働時間が12時間を超えてはならないとしている³⁶⁾が、それにしても長時間労働を課していたことになる。第四條で政府のこの規則を違反した製作場長には5フランないし100フランの罰金が課せられることになっている。

拙稿「藤枝市の農村部における耕地の分散・細分と農家の社会的関係³⁷⁾」で論じたように、耕地の細分化、分散はかつて著しいものがあつたが、土地の交換分合（耕地の集団化 Remembrement）をはかる試みはフランスにおいて早くから施行意見が出されていた³⁸⁾。取調書の中でも、この部分は詳しく述べられているので、本稿でも比較的詳細に論じてみたい。次に、土地分合施行意見を取り上げるが、農作地部内に散在した小分地の細分を防ぐ方法と題して、参事院議員、農務局長チスラン氏の意見を紹介している。

土地分合施行 冒頭には、「農作地ノ相隔離セル小分地ニ分レ特ニ一邑内ノ全部ニ其小分地ノ散在シ又往々其相遠隔シテ甚タ大ナル距離ニ在ルノ弊害ニ農學者及政府ノ注意ヲ惹起シタルハ既ニ多年來ナリトス 此弊害ヲ防遏スヘキ最初ノ方策ニ係ル思考ハ全ク佛蘭西國ニ發生シタルモノナリ³⁹⁾」と述べられているように、土地分合（耕地の集団化）の考えはフランスで芽生え熟したものである。「各所有者ノ散在セル小分地ヲ合併シ各所有地ハ農作者ニ於テ隣人ノ地ヲ過キルノ必要ヲ避ル爲メニ皆公道ニ直接スル方法ヲ以テシテ百事ヲ處分シタリ⁴⁰⁾」と、土地の交換分合によって耕地が直接道路に面することが可能になったのである。

ドイツの例ではあるが、北ドイツ新聞の抜粋よりカッセル郡（ドイツの中央に近い郡、筆者注）の小分地併合について講究している。

カッセル郡の事例 プロシヤに併合される以前には、カッセル郡の土地は「分有ノ土地ハ一般ニ小ニシテ出入ノ道路ナク互ニ圍遶シテ形ノ正シカラサルモノ往々ニシテ之アリキ⁴¹⁾」と、耕地の形も不規則で道路に接することもなく隣人の土地に囲まれていた。土地交換分合の事業は当事者の利害が錯綜するため、反対者や妨害する者も当然出現する。しかしながら、賛成する者が多い中であつては抵抗は一時的なものであり、「新變説者 前ニ抗拒シテ後ニ聽從シタル者ヲ云フ ハ後日ノ事業ニ参同シテ其熱心勤勉セシ事ハ少カラサリト云フ⁴²⁾」。反対していた者の方がその後、事業に熱心に取組むことはよくあることである。

交換分合の長所は次の点にもある。

「抑々土地ノ合併ニ因テハ會テ農作牧畜等ノ事業ニ要シタル道路ノ爲メニ空フシタル土地ノ著大ナル面積ヲ耕作ニ供スルノ結果ヲ生シタル者トス⁴³⁾」とあるように、耕地の分散・細分化、不規則な形状の際には、道路や畦にかなりの土地が無駄になっていたのである。1882年度におけるカッセル郡の交換分合事業に対し、767万1,262フランを用したが、地元関係者の支払いが

380万625フラン、政府の支出が386万5,012フラン⁴⁴⁾と、費用の半分が公共負担になっていることがわかる。「カッセル郡ニ於テハ土地ノ小分甚シキヲ以テ千五百分ノ一ノ縮圖ヲ製シタルモノトス此測量師ハ十年ノ間過失ナク職務ヲ執行シタル後二千六百二十五法及至三千七百五十法ノ在職俸給ヲ本トシテ計算シ農務大臣ニ於テ支辨スル所ノ退隱恩給料ヲ受クルノ權理アルモノナリ⁴⁵⁾」とあるように、土地の測量師は10年過失なしに働けば恩給を受ける権利が生じたことを伝えている。

カッセル郡に於ては、小分地合併事業に関わる対象者は41,112名であったが、土地所有規模別の関係者数と百分率は次の通りである。1 ha 以下が27,008名 (65.7%)、1～5 ha が9,430名 (22.9%)、5～10ha が2,001名 (4.9%)、10～25ha が1,899名 (4.6%)、25～40ha が456名 (1.1%)、40ha 以上が318名 (0.8%) であり、均等分割制度もあって土地所有がいかにか細分されていたか、しかも5 ha 以下の零細・小規模土地所有者が9割近くを占めていたことがわかる。零細・小規模所有者程、土地交換分合（耕地の集団化）から得られる利益は大きいといえる。次に、耕地の集団化から生ずる利点について更に詳しくみてみよう。

耕地集団化の利点 「小分地併合ノ結果ハ早く既ニ其利益ヲ感セシメタリ 此有要ナル事業ヲ施行シタル土地ハ皆土地耕作ノ技術上ニ係ル方法大ニ進歩シ舊ノ三年期輪耕法ハ面積ノ大ナラサル地ニ在テハ特に益消滅シテ一般ニ売賣肥料ヲ使用スルニ至リ秣草ノ産出ハ漸ク擴張ノ景況アリ⁴⁶⁾」。かつての三年輪作がなくなり、購入肥料を投じて小規模の耕地で生産力を高めようという動きが出てきている。果樹栽培技術にも、「菓樹圃菜園ノ如キハ會テ僅カニ數メートル四方ノ面積ニシテ他ノ同シク廣カラサル小分地ニ遮斷セラレ閉園垣ナク猪豚ノ來テ荒害ヲ爲シ又秋季ニ於テハ獸群ノ通牧スル所タリシ⁴⁷⁾」であったので、所有主も耕地の手入れをせず荒れたままであった。しかし、交換分合後は耕地の形状も一変し、良種の果樹を植え、良種の穀類を播いたため、土地の価格は4倍となった⁴⁸⁾。「耕地ニアリシ境界ノ畦ヲ發シタル事ハ大數ナルヲ以テ輕視ス可ラサル土地ノ面積ヲ得タリ⁴⁹⁾」とあるように、畦を取り除いたことにより浮いた土地は少なからぬものがあつたのである。ある例では、平均4～8アールから成る耕地919haのうち、畦に費やされた土地は実に33ha ないし93ha にも及んでいた⁵⁰⁾という。かつての農道は曲りくねり狭すぎて溝渠もなく一直線ではなかったが、集団化した後はそれらが可能になったことも利点の1つである。零細な耕作者が蔬菜や馬鈴薯などの自給用作物をまとめた土地で栽培できるようになったことも大きい⁵¹⁾としている。村落内で無産者となる数を減らすことは国家の負担軽減につながるからである。

最後に、1884年6月19日発行の北ドイツ新聞の抜粋が資料として挙げられているので、要点を見ることにしたい。農務局ヲルリー氏署名記事⁵²⁾の翻訳である。

土地交換分合事業が当該者の反対や妨害なしに行われた訳ではない点は次にみる通りである。すなわち、「一日大臣ハハノー郡ノフスタイム邑ヲ巡回セリ此邑ハ四年前ニ人民動搖シ石ヲ擲チ又脅迫ヲ以テ事業ニ任スル測量數學士ヲ追逐シ小分地ノ併合ヲ以テスル所有地再構成ノ施行ヲ妨ケン事ヲ試ミタル所ナリ⁵³⁾」。そのため、人々が動揺して争いが起きているにもかかわらず大臣名で強制法が施行されたのである。その結果、かつて9,400の地筆に細分された880haの土地が1,160の土地に併合された。苦情を鳴らしたのはわずか6名のみで、591名は事業の施行を承諾した⁵⁴⁾。土地併合後、土地の価格は3倍となった。

以上、本稿では『歐米巡回取調書』の記述順に従って、地理学の立場から興味ある箇所を取

り出し、若干の考察を加えてきた。次に、本稿のまとめに入りたい。

3 お わ り に

本稿は明治20年前後に欧米を巡回した農商務省の谷大臣以下6名が各国で調査し、蒐集した資料を取りまとめた記録、『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』を地理学の立場から分析し、考察を加えたものである。今回は1～3巻、主にフランスを扱った部分を取り上げたが、一行が強行スケジュールの中で如何にどん欲に資料を集め、観察した後、詳細な記録を日本に次々に送付していたかは本論で論じた通りである。彼らの報告が明治以来の富国強兵政策にどれ程の影響を与えたか、又活用されたのかに関しては、筆者は論ずる能力も資格も持ちあわせていない。しかし、その後の我が国の中央行政、地方行政への基礎的資料の一つを提供したことは間違いなく言えるのではなからうか。もとより筆者の研究関心は地理学の領域にあるので、本論での引用や考察が偏ったものになったであろうことは否めない。外国に出ると、誰しも行け彼我の比較も『欧米巡回取調書』の中では比較的冷静に書き進められており、今日のEUの出現を予見するような卓見も述べられている。次の稿ではドイツ・ベルギーを中心とした記録の分析を行い、考察を加えたいと考えている。

注

- 1) 大嶽幸彦 (1980) : 「風土と人間への地理学的アプローチ——ヨーロッパの風土と日本人を例として——」神戸大学教養部紀要「論集」26号, 35～46
柴田剛中の日記全体を通して言えば、次のようにまとめられよう。すなわち、言葉のあまり通じぬ英仏での条約交渉、雇入外国人の面談等の心労、各所の見分はしてもヨーロッパ文化の根底には興味を持とうとしない。終始つきまとう旅愁と心は常に日本に向いているため、必要以外の事は見えないし、聞えない。従って、呆然自失の状態に陥りがちであるが、漢詩を作ったり日記を書き続けることでようやく精神のバランスを保っている。しかし、柴田剛中の物を見る目は鋭く、確かであるため、読みごたえのある記録である。君塚 進校注 (1974) 「仏英行 (柴田剛中日載七・八より)」沼田次郎・松沢弘陽校注『西洋見聞集』所収、岩波書店, pp.261～476
- 2) 大嶽幸彦 (1983) : 「幕末前後における二人の先覚者の地理思想——吉田松陰と福沢諭吉の旅行記を中心に——」歴史地理学, 第122号, 15～20
- 3) 農商務省 (1888) : 『農商務省蔵版 欧米巡回取調書 總覧 一』大成館, 感覺録 p.1
- 4) 前掲3)p.1
- 5) 前掲3)p.3
- 6) 前掲3)p.3
- 7) 前掲3)p.4
- 8) 前掲3)p.4
- 9) 前掲3)p.5

- 10) 前掲3)p.20
- 11) 前掲3)p.20
- 12) 前掲3)p.33
- 13) 前掲3)p.38
- 14) 前掲3)p.38
- 15) 前掲3)p.44
- 16) 前掲3)p.45

未知の言語圏にあっても視覚によって異文化を理解した例として次のものは参考となる。「文久元（1862）年12月、竹内下野守保徳の遣欧使節に従って渡仏した市川渡は初めて見る異国の景観をすべからくその眼に映じたままに書きとっている。……（中略）……レールの幅を測り、建物の階層を数え、ガス灯とガス灯との距離を計測するという市川はまったく言語を媒介せずに視覚判断によって西洋とその文化を理解しようと試みたわけである。」富田 仁編（1986）：『異文化との出会い、日本人と欧米人の海外体験』三修社、p.290

- 17) 前掲3)pp.55～58
- 18) 前掲3)pp.59～82
- 19) 筆者はアーサー・ヤングの地理的観察眼について、風景・景観、気候・水文、土地所有・土地利用、都市、道路・交通・商工業、革命下のフランスに分けて、検討を試みたことがある。その結果、本書がフランス革命前後の地理的様相を知る貴重な資料の1つであることを明らかにした。大嶽幸彦（1993）：「フランス革命時におけるアーサー・ヤングの地理的観察眼——『フランス紀行』を中心に——」上越教育大学研究紀要、第13巻1号、253～264
- 20) 農商務省（1888）：『農商務省蔵版 欧米巡回取調書、法朗西國之部上 二』大成館、p.1
現在においてもコミューンの数は36,433と多く、平均の面積は15km²、人口は1,500人しかいない。Denise Pumain et al.（1990）：『Géographie Universelle, France, Europe du Sud』Hachette、p.64
- 21) 農商務省（1888）：『農商務省蔵版 欧米巡回取調書、法朗西國之部上 二』大成館、pp.1～2
- 22) 前掲21)pp.6～7
- 23) 前掲21)pp.266～275
- 24) 前掲21)p.410
- 25) 前掲21)p.411
- 26) 前掲21)p.412
- 27) 前掲21)p.413
- 28) 前掲21)p.413
現在、フランスは世界第6位の砂糖生産国、世界第4位の砂糖輸出国である。（『世界国勢図会、96/97』による。）てん菜の生産（1994年）に関していえば、合衆国に次ぎ世界第2位である。（『データブック オブ ザ ワールド Vol.8 1996』二宮書店による。）
- 29) 前掲21)p.633
- 30) 前掲21)p.633
- 31) 前掲21)p.634
- 32) 前掲21)p.635

- 33) 前掲21)p.645
- 34) 前掲21)p.635
- 35) 前掲21)p.636
- 36) 隣国のイギリスでは1847年に10時間労働法が成立しているから、フランスは2時間長い。
- 37) 大嶽幸彦 (1969) : 「藤枝市の農村部における耕地の分散・細分と農家の社会的関係」 地理学評論, 第42巻第6号, 376~389
大嶽幸彦 (1979) : 「土地台帳より見たる土地所有の細分化と均等分割制——マインツ近郊ギンスハイムを例として——」 歴史地理学会会報106号, 11~16
- 38) フランスで最初の耕地の集団化 Remembrement が行われたのは1770年, ヌビル・シュル・モーゼルであり, 地方長官のイニシアティブによるものであった。しかし, 関係する法律が整備され始めたのは19世紀末からにすぎない。Pinchemel, Ph. (1964) : 『Géographie de la France, Tome 2』 Armand Colin, p.382
- 39) 農商務省 (1888) : 『農商務省藏版 歐米巡回取調書 法朗西國之部下 三』大成館, p.367
- 40) 前掲39)p.369
- 41) 前掲39)p.393
- 42) 前掲39)p.396
- 43) 前掲39)p.399
- 44) 前掲39)p.401
- 45) 前掲39) pp.401~402
- 46) 前掲39)p.407
- 47) 前掲39)p.408
- 48) 前掲39)p.408
- 49) 前掲39)p.408
- 50) 前掲39)p.409
- 51) 前掲39)p.410
- 52) 筆者も南ドイツ新聞のコラム (1978年5月16日) にあった署名入りの記事「風向きが変わったときに」を紹介したことがある。大嶽幸彦 (1979) : 『ドイツ文化と日本人』古今書院, pp.58~60
- 53) 前掲39)p.441
- 54) 前掲39)p.442

参 考 文 献

- 久米邦武編・田中 彰校注 (1977) : 『米欧回覧実記(-)』岩波書店, 427P.
大嶽幸彦 (1980) : 『国際化時代の地理学』大明堂, 125P.
富田正文編 (1981) : 『福沢諭吉選集 第2巻』岩波書店, 271P.
大嶽幸彦・二本敏篤編著 (1983) : 『国際理解としての地理学』大明堂, 203P.
木村力雄 (1986) : 『異文化遍歴者 森有礼』福村出版, 255P.
沼田次郎 (1989) : 『洋学 <日本歴史叢書40>』吉川弘文館, 283P.
大嶽幸彦 (1990) : 『旅と地理思想』大明堂, 139P.

The Analysis of “Ohbei Junkai Torishirabesho”
—“Reports of Investigation on Europe and the United States”—
from the Angle of Geography
——focusing on some Examples in France——

Yukihiko OHDAKE*

ABSTRACT

The object of this research consists in the analysis of “Ohbei Junkai Torishirabesho” —reports of investigation on Europe and the United States—published in the 21th year of the Meiji era (1888).

The author has analysed the contents of I ~III volumes. He has quoted some examples of geographical matters, and tried to give them some consideration.

* Division of Social Studies, Department of Humanities and Social Sciences.